〔B 年〕棕櫚の主日(2026 年 3 月 29 日)

【入堂行列・旧約聖書日課】ゼカリヤ書9章9～10節

9 娘シオンよ、大いに踊れ。
　娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。
　見よ、あなたの王が来る。
　彼は神に従い、勝利を与えられた者
　高ぶることなく、ろばに乗って来る
　雌ろばの子であるろばに乗って。
10 わたしはエフライムから戦車を
　エルサレムから軍馬を絶つ。
　戦いの弓は絶たれ
　諸国の民に平和が告げられる。
　彼の支配は海から海へ
　大河から地の果てにまで及ぶ。

【入堂行列・福音書日課】マルコによる福音書11章1～11節

1一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもと
にあるベトファゲとベタニアにさしかかったとき、イ
エスは二人の弟子を使いに出そうとして、2言われた。
「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだ
れも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つ
かる。それをほどいて、連れて来なさい。3もし、だれ
かが、『なぜ、そんなことをするのか』と言ったら、
『主がお入り用なのです。すぐここにお返しになりま
す』と言いなさい。」4二人は、出かけて行くと、表通
りの戸口に子ろばのつないであるのを見つけたので、
それをほどいた。5すると、そこに居合わせたある人々
が、「その子ろばをほどいてどうするのか」と言った。
6二人が、イエスの言われたとおり話すと、許してくれ
た。7二人が子ろばを連れてイエスのところに戻って来
て、その上に自分の服をかけると、イエスはそれにお
乗りになった。8多くの人が自分の服を道に敷き、また、
ほかの人々は野原から葉の付いた枝を切って来て道に
敷いた。9そして、前を行く者も後に従う者も叫んだ。
　「ホサナ。
　主の名によって来られる方に、
　祝福があるように。
10 我らの父ダビデの来るべき国に、
　祝福があるように。
　いと高きところにホサナ。」
11こうして、イエスはエルサレムに着いて、神殿の境内
に入り、辺りの様子を見て回った後、もはや夕方にな
ったので、十二人を連れてベタニアへ出て行かれた。

【旧約聖書日課】イザヤ書50章4～7節

4 主なる神は、弟子としての舌をわたしに与え
　疲れた人を励ますように
　言葉を呼び覚ましてくださる。
　朝ごとにわたしの耳を呼び覚まし
　弟子として聞き従うようにしてくださる。
5 主なる神はわたしの耳を開かれた。
　わたしは逆らわず、退かなかった。
6 打とうとする者には背中をまかせ
　ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。
　顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。
7 主なる神が助けてくださるから
　わたしはそれを嘲りとは思わない。
　わたしは顔を硬い石のようにする。
　わたしは知っている
　わたしが辱められることはない、と。

【使徒書日課】フィリピの信徒への手紙2章5～11節

5互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・
イエスにもみられるものです。6キリストは、神の身分
でありながら、神と等しい者であることに固執しよう
とは思わず、7かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、8
へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至
るまで従順でした。9このため、神はキリストを高く上
げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。10こ
うして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべ
て、イエスの御名にひざまずき、11すべての舌が、「イ
エス・キリストは主である」と公に宣べて、父である
神をたたえるのです。

【福音書日課】マルコによる福音書15章21～41節

21そこへ、アレクサンドロとルフォスとの父でシモ
ンというキレネ人が、田舎から出て来て通りかかった
ので、兵士たちはイエスの十字架を無理に担がせた。
22そして、イエスをゴルゴタという所――その意味は
「されこうべの場所」――に連れて行った。23没薬を混
ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはお受け
にならなかった。24それから、兵士たちはイエスを十字
架につけて、
　その服を分け合った、
　だれが何を取るかをくじ引きで決めてから。
25イエスを十字架につけたのは、午前九時であった。
26罪状書きには、「ユダヤ人の王」と書いてあった。27
また、イエスと一緒に二人の強盗を、一人は右にもう
一人は左に、十字架につけた。† 29そこを通りかかった
人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。
「おやおや、神殿を打ち倒し、三日で建てる者、30十字
架から降りて自分を救ってみろ。」31同じように、祭司
長たちも律法学者たちと一緒になって、代わる代わる
イエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分
は救えない。32メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架
から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」一
緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしっ
た。
33昼の十二時になると、全地は暗くなり、それが三時
まで続いた。34三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロ
イ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、
わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と
いう意味である。35そばに居合わせた人々のうちには、
これを聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる」と言う者
がいた。36ある者が走り寄り、海綿に酸いぶどう酒を含
ませて葦の棒に付け、「待て、エリヤが彼を降ろしに
来るかどうか、見ていよう」と言いながら、イエスに
飲ませようとした。37しかし、イエスは大声を出して息
を引き取られた。38すると、神殿の垂れ幕が上から下ま
で真っ二つに裂けた。39百人隊長がイエスの方を向い
て、そばに立っていた。そして、イエスがこのように
息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の
子だった」と言った。40また、婦人たちも遠くから見守
っていた。その中には、マグダラのマリア、小ヤコブ
とヨセの母マリア、そしてサロメがいた。41この婦人た
ちは、イエスがガリラヤにおられたとき、イエスに従
って来て世話をしていた人々である。なおそのほかに
も、イエスと共にエルサレムへ上って来た婦人たちが
大勢いた。

「聖書協会共同訳」（2018 年版）読み比べ

ゼカリヤ書9章9～10節

9 娘シオンよ、大いに喜べ。
　娘エルサレムよ、喜び叫べ。
　あなたの王があなたのところに来る。
　彼は正しき者であって、勝利を得る者
　へりくだって、ろばに乗って来る
　雌ろばの子、子ろばに乗って。
10 私はエフライムから戦車を
　エルサレムから軍馬を絶つ。
　戦いの弓は絶たれ
　この方は諸国の民に平和を告げる。
　その支配は海から海へ
　大河から地の果てにまで至る。

マルコによる福音書11章1～11節

1一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山に面したベトファゲとベタニアにさしかかったとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、2言われた。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだ誰も乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、連れて来なさい。3もし、誰かが、『なぜ、そんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐここにお返しになります』と言いなさい。」4二人は、出かけて行くと、表通りの戸口に子ろばのつないであるのを見つけたので、それをほどいた。5すると、そこに居合わせた人々が、「その子ろばをほどいてどうするのか」と言った。6二人が、イエスの言われたとおり話すと、許してくれた。7二人が子ろばをイエスのところに連れて来て、その上に自分の上着を掛けると、イエスはそれにお乗りになった。8多くの人が自分の上着を道に敷き、また、ほかの人々は野原から葉の付いた枝を切って来て敷いた。9そして、前を行く者も後に従う者も叫んだ。
　「ホサナ。
　主の名によって来られる方に
　　祝福があるように。
10 我らの父ダビデの来るべき国に
　　祝福があるように。
　いと高きところにホサナ。」
11こうして、イエスはエルサレムに着いて、神殿の境内に入られた。り、そして、周囲を一瞥した後、すでに夕方になったので、十二人を連れてベタニアへ出て行かれた。

イザヤ書50章4～7節

4 主なる神は、弟子としての舌を私に与えた
　疲れた者を言葉で励ますすべを学べるように。
　主は朝ごとに私を呼び覚まし
　私の耳を呼び覚まし
　弟子として聞くようにしてくださる。
5 主なる神は私の耳を開かれた。
　私は逆らわず、退かなかった。
6 打とうとする者には背中を差し出し
　ひげを抜こうとする者には頬を差し出した。
　辱めと唾から私は顔を隠さなかった。
7 主なる神が私を助けてくださる。
　それゆえ、私は恥を受けることはない。
　それゆえ、私は顔を火打ち石のようにし
　辱められないと知っている。

フィリピの信徒への手紙2章5～11節

5互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。
6 キリストは
　神の形でありながら
　神と等しくあることに固執しようとは思わず、7 かえって自分を無にして
　僕の形をとり
　人間と同じ者になられました。
　人間の姿で現れ、
8 へりくだって、死に至るまで
　それも十字架の死に至るまで
　従順でした。
9 このため、神はキリストを高く上げ
　あらゆる名にまさる名を
　お与えになりました。
10 それは、イエスの御名によって
　天上のもの、地上のも、地下のものすべてが
　膝をかがめ
11 すべての舌が
　「イエス・キリストは主である」と公に告白して
　父なる神が崇められるためです。

マルコによる福音書15章21～41節

21そこへ、アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人が、畑から帰って来て〔*別訳→田舎から出て来て*〕通りかかったので、兵士たちはこの人を徴用し、イエスの十字架を担がせた。22そして、イエスをゴルゴタという所、訳せば「されこうべの場所」に連れて行った。23没薬〔ミルラ〕を混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはお受けにならなかった。24それから、兵士たちはイエスを十字架につけて、
　誰が何を取るか、くじを引いて
　その衣を分け合った。
25イエスを十字架につけたのは、午前九時であった。26罪状書きには、「ユダヤ人の王」と書いてあった。27また、イエスと一緒に二人の強盗を、一人は右にもう一人は左に、十字架につけた。† 29そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスを罵って言った。「おやおや、神殿を壊し、三日で建てる者、30十字架から降りて自分を救ってみろ。」31同じように、祭司長たちも律法学者たちと一緒になって、代わる代わるイエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分は救えない。32メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」一緒に十字架につけられた者たちも、イエスを罵った。
33昼の十二時になると、全地は暗くなり、三時に及んだ。34三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」という意味である。35そばに立っていた何人かが、これを聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる」と言った。36ある者が走り寄り、海綿に酢〔ワインビネガー〕を含ませて葦の棒に付けてイエスに飲ませ、「待て、エリヤが彼を降ろしに来るかどうか、見ていよう」と言った。37しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。38すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。39イエスに向かって立っていた百人隊長は、このように息を引き取られたのを見て、「まことに、この人は神の子だった」と言った。
40また、女たちも遠くから見守っていた。その中には、マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリア、そしてサロメがいた。41この女たちは、イエスがガリラヤにおられたとき、その後に従い、仕えていた人々である。このほかにも、イエスと共にエルサレムへ上って来た女たちが大勢いた。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・3 月 29 日「棕櫚の主日」の日課主題は「十字架への道」。この日から、「受難週」または「聖週間」と呼ばれる特別な一週間が始まる。その初日である「棕櫚の主日（枝の日）」に、伝統的な教会は、「棕櫚の出来事」を記念するために、主日礼拝を会堂（聖堂）の外で始め、「棕櫚の箇所」を朗読し、「ホサナ」の讃美を歌いながら会堂周囲を行列行進した後に入堂して礼拝を始める、という習慣を受け継いできた。

・「棕櫚の主日」のための入堂行進（棕櫚の行進）に際して朗読される箇所は、旧約が「ゼカリヤ書」から（毎年固定）、福音書が「棕櫚の出来事」となっている。

・旧約日課は、「イザヤ書」から、「第三の主の僕の歌」の箇所。使徒書日課は、「フィリピの信徒への手紙」から、「キリスト讃歌」と呼ばれる箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、裁判を終えた主イエスが十字架と共に刑場に引かれて行き、処刑、息を引き取られるまでを伝える箇所。

旧約日課（イザヤ 50 章より）

・「イザヤ書」は、ユダヤ正典（ヘブライ語聖書）の区分で「後の預言者」の第一に置かれる預言文書。本書概説は、資料「聖書と祈りの会 260304」も参照。

・日課箇所は、本書後半部（40 章以下＝通例「第二イザヤ」と呼ぶ）の中で「主の僕の歌」と呼ばれる四つの箇所（①42:1～4、②49:1～9、③50:4～11、④52:13～53:12）の内の一つ。「主の僕の歌」は、主なる神が特別な使命のために選び出された「僕（弟子）」に関する歌として展開し、その「僕」が最終的に侮辱と排斥という苦難のうちに忘れられる運命にあるということが歌われるもので、日課箇所の「第三の歌」も、「僕」が屈辱を耐えるさまが歌われている。

・この「僕」は一貫して匿名の人物として扱われている。この「僕」が、歴史上実在した人物を描いたものなのか、架空の人物なのか、長らく議論がされてきたが、学者間で共通理解は得られていない。歴史上の人物であるとすれば、「第二イザヤ」を編じた祭司預言者集団、あるいは彼らが仕えた指導者などが選択肢として想定される。「第二イザヤ」は、前 6 世紀後半、ペルシア帝国キュロス王によってバビロン捕囚から解放され、同王の任命によってダビデ王族末裔のゼルバベルがユダヤ総督に、また祭司家系のヨシュアがエルサレム神殿大祭司に任じられ、エルサレムの再興事業が始められていく時代に、彼ら旧王族・旧貴族に仕える祭司集団のうち、前 8 世紀の預言者イザヤを模範とする集団によって告げられた預言と考えられる。エルサレム再興事業が難航したことは、「エズラ記・ネヘミヤ記」が伝えており、「第二イザヤ」預言者集団も、「主の僕の歌」で歌われるように困難に耐え、また辛酸を舐めた可能性は大いに考えられる。

・「第二イザヤ」において「イザヤの伝統」は、「神の言葉に対する信頼」として受けとめられている。

使徒書日課（フィリピ 2 章より）

・「フィリピの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第 6 に置かれた書簡文書。パウロが、シリア・アンティオキアの教会共同体の指導者バルナバの率いる宣教団を離れ、独自の宣教団を組織して取り組んだ「マケドニア宣教」において創設したフィリピの教会共同体に宛てて、近況を知らせ、信仰を励ます目的で記されている。聖書学者の中には、複数の書簡をまとめたものと解する者もあるが、正典としての本書簡は、書簡の様式を満たしたものとなっており、一体の書簡として解することに困難があるわけではない。

・パウロのフィリピ宣教については、「使徒言行録」が 16 章で伝えており、フィリピの教会共同体には、多くの信者は得られていなかったものの、「紫布を商うユダヤ人女性リディア」など裕福で有力な信者がいたものと推認される。本書簡でも、パウロが同地を離れた後も継続的に経済的な支援をパウロに与え続ける関係が続けられていたことが示唆され（4:10 以下）、また、他の書簡からもフィリピ教会の人々がパウロの意向に沿って「エルサレム教会のための募金」にも参加していたことが知られる（「ローマ」15:25~27、「第二コリント」8~9 章など）。本書簡や一連の関連する記述からは、パウロが同教会の人々と特別な信頼関係を築いていたことが推察される。パウロがこのような関係を保つことができた教会は、「テサロニケ」がそうである可能性があるとしても、他には見られない。

・日課箇所のうち 6 節以下は、「キリスト讃歌」と呼ばれる箇所で、従来から「キリストの謙卑」が述べられた特別な箇所として扱われてきたが、近年はイエス・キリストについての初期の信仰告白典礼文あるいは讃美歌が元になっているのではないかと推認されるようになっている。「謙卑」は、徹底した謙遜と自己卑下を意味するキリスト教用語。

・日課箇所は、前段までに勧めたことの根拠として「キリスト讃歌」で示される「謙卑」を提示し、これに倣うように教えるものとなっている。前段（1～4 節）で勧められていることの鍵語となっているのが、「虚栄心」の対義として挙げられる「へりくだり」（3 節）である。「へりくだり」の原語「タペイノフロシュネー」の原義は、「低い/卑しい（タペイノス）」＋「考え（フロネーシス）」。この語で示そうとしている事柄を理解する上で、4 節の解釈は注意が必要。4 節は、原典写本によっては「めいめい自分のことではなく、他人のことに注意を払いなさい」となっているが、伝統的に「めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも…」となっている写本に基づいて訳されている。伝統的な訳では、「自分のこと」にかまけて「他人のこと」を疎かにしてはいけない、というニュアンスになるが、異なる写本の訳では、「自分のこと」を差し置いても「他人のこと」に注意を払うべきだ、というニュアンスになる。日課箇所の「キリストの謙卑」を模範とするのであれば、伝統的な訳よりも異なる写本訳が適当という判断もあり得る。

福音書日課（マルコ 15 章より）

・日課箇所は、エルサレムで逮捕され裁判にかけられた主イエスが、刑場まで十字架を担いで歩かされ、刑場で刑執行された「十字架死」の出来事を描く伝承説話箇所。出来事としては四福音書が共通して伝えるが、共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ）とヨハネ福音書とでは詳細の伝え方に大きな相違がある。

・刑場までの道行き（ラテン語で「ヴィア・ドロローサ」と呼びならわされている）について、共観福音書は、主イエスが担がされていた十字架を途中から「キレネ人シモン」が担がされることになったと伝えるが、ヨハネ福音書は主イエスご自身が担いで行かれたと強調している（ヨハネ 19:17）。共観福音書は、「受難物語」第一部（受難予告からエルサレム入り前の一連の出来事を物語る）の初めに、弟子たちに対して主イエスが「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」（マルコ 8:34＝マタイ 16:24、ルカ 9:23）と告げられたことを描いており、主イエス同様に「十字架を背負う」ことを象徴的に強調している。この「十字架を背負う」ことが、必ずしも十字架刑に処せられることではなく、象徴的な意味であることを、「キレネ人シモン」の出来事は示していると解せる。

・「キレネ人シモン」の子らとして「アレクサンドロとルフォス」の名が挙げられており、彼らが初期教会のメンバーであったことが示唆される。「ローマ」16:13 の「ルフォス」と同定する学者もいる。

・39 節「本当にこの人は神の子だった」という百人隊長の発言は、マルコ福音書の標題「神の子イエス・キリストの福音の初め」（1:1）を回収する発言。主イエスを「神の子」と呼ぶ発言は、3:11 および 5:7 にも見出されるが、これらはいずれも「汚れた霊」の発言（1:24 も参照）。百人隊長はローマ人（異邦人）であるが、人間として主イエスを「神の子」と呼んでいる。「マルコ」は伝えていないが、「マタイ」や「ルカ」は、主イエスが一人の百人隊長の「信仰」を高く評価したという出来事を伝えている（マタイ 8:5~13、ルカ 7:1~10）。

来週の誕生日 （3 月 29 日～4 月 4 日）

主日礼拝の讃美歌から

・21-307**「ダビデの子、ホサナ」**は、スウェーデン語聖書のマタイ 21:9 の聖句に、18 世紀末スウェーデン国王の招きで活動したドイツ人音楽家フォクラーが作曲。スウェーデンおよびフィンランドの福音ルーテル教会讃美歌集で 1 番に収められた待降節第 1 主日用の讃美歌。フィンランド語版からこども讃美歌に採用され、棕櫚の主日の聖句であることに即して受難節ことに棕櫚の主日用の讃美歌として採用。

・21-306**「あなたもそこにいたのか」**（＝Ⅱ 177）は、代表的なアフロ・アメリカン霊歌の一つで、歌詞および曲には多数の版が知られている。初出は、19 世紀末、ウィリアム・E・バートンの編じた讃美歌集。

・21-311**「血しおしたたる」**（＝Ⅰ 136）は、12 世紀フランスの神秘思想家クレルヴォーのベルナルドゥスの弟子であるシトー会修道士アルヌルフ・フォン・レーヴェンのラテン詩に基づいて、17 世紀ドイツを代表する讃美歌作家 P. ゲルハルトが作詞。曲は、ルター派の作曲家ハンス・レオ・ハスラーが恋愛歌「わが心は千々に乱れ」として作曲した旋律で、1613 年出版のコラール集「聖なる調和」に「心より憧れ望む」の曲として採用されていたものが、1656 年出版の讃美歌集「歌による敬虔の訓練」でゲルハルトの歌詞と結びつけられた。原曲は 310 番のリズムだったが、「血しおしたたる」と結びつけられるまでに 311 番のリズムに改変された。

21-306「あなたもそこにいたのか」

Were You There

1. Were you there when they crucified my Lord?
   Were you there when they crucified my Lord?
   Oh, sometimes it causes me to tremble, tremble, tremble.
   Were you there when they crucified my Lord?
2. Were you there when they nailed him to the tree?
   Were you there when they nailed him to the tree?
   Oh, sometimes it causes me to tremble, tremble, tremble.
   Were you there when they nailed him to the tree?
3. Were you there when they laid him in the tomb?
   Were you there when they laid him in the tomb?
   Oh, sometimes it causes me to tremble, tremble, tremble.
   Were you there when they laid him in the tomb?
4. Were you there when God raised him from the tomb?
   Were you there when God raised him from the tomb?
   Oh, sometimes it causes me to tremble, tremble, tremble.
   Were you there when God raised him from the tomb?

21-311「血しおしたたる」

O Haupt voll Blut und Wunden

1. O Haupt voll Blut und Wunden, / voll Schmerz und voller Hohn, / o Haupt, zum Spott gebunden / mit einer Dornenkron, o Haupt, / sonst schön gezieret / mit höchster Ehr und Zier, / jetzt aber hoch schimpfieret: / gegrüßet seist du mir!
2. Du edles Angesichte, / davor sonst schrickt / und scheut das große Weltgewichte: / wie bist du so bespeit, / wie bist du so erbleichet! / Wer hat dein Augenlicht, / dem sonst kein Licht nicht gleichet, / so schändlich zugericht'?
3. Nun, was du, Herr, erduldet, / ist alles meine Last; / ich hab es selbst verschuldet, / was du getragen hast. / Schau her, hier steh ich Armer, / der Zorn verdienet hat. / Gib mir, o mein Erbarmer, / den Anblick deiner Gnad.
4. Erkenne mich, mein Hüter, / mein Hirte, nimm mich an. / Von dir, Quell aller Güter, / ist mir viel Guts getan; / dein Mund hat mich gelabet / mit Milch und süßer Kost, / dein Geist hat mich begabet / mit mancher Himmelslust.
5. Ich will hier bei dir stehen, / verachte mich doch nicht; / von dir will ich nicht gehen, / wenn dir dein Herze bricht; / wenn dein Haupt wird erblassen / im letzten Todesstoß, / alsdann will ich dich fassen / in meinem Arm und Schoß.
6. Es dient zu meinen Freuden / und tut mir herzlich wohl, / wenn ich in deinem Leiden, / mein Heil, mich finden soll. / Ach möcht ich, o mein Leben, / an deinem Kreuze hier / mein Leben von mir geben, / wie wohl geschähe mir!
7. Ich danke dir von Herzen, / o Jesu, liebster Freund, / für deines Todes Schmerzen, / da du´s so gut gemeint. / Ach gib, dass ich mich halte / zu dir und deiner Treu / und, wenn ich einst erkalte, / in dir mein Ende sei.
8. Wenn ich einmal soll scheiden, / so scheide nicht von mir, / wenn ich den Tod soll leiden, / so tritt du dann herfür; / wenn mir am allerbängsten / wird um das Herze sein, / so reiß mich aus den Ängsten / kraft deiner Angst und Pein.
9. Erscheine mir zum Schilde, / zum Trost in meinem Tod, / und lass mich sehn dein Bilde / in deiner Kreuzesnot. / Da will ich nach dir blicken, / da will ich glaubensvoll / dich fest an mein Herz drücken. / Wer so stirbt, der stirbt wohl.